

ふれあい活カゆとり

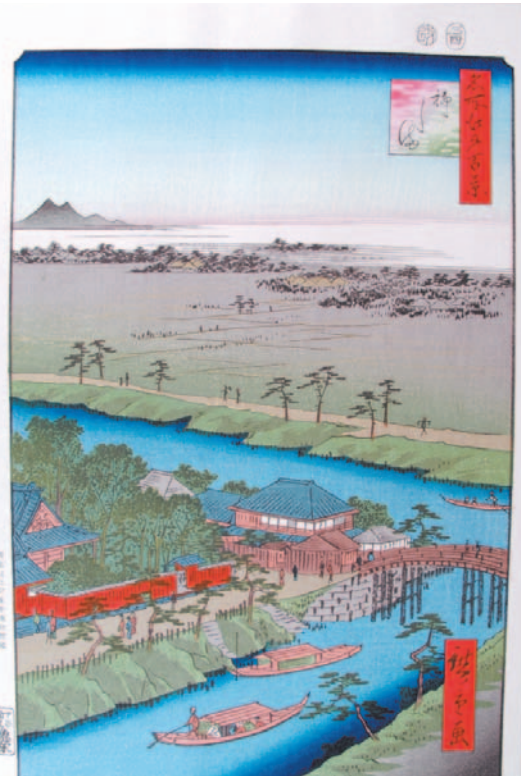
すみだ

We!



すみだの風景 墨田区内の河川

その2 横十間川と橋の沿革



歌川広重「柳しま」

横十間川は、江戸時代の万治年間（1658年から1661年まで）に始まった本所開拓の際に開削された堀割で、現在は墨田区と江東区との境界となっている一級河川です。名称は、江戸城に対して横に流れ、川幅が10間（約18m）であったことに由来しています。東岸には、寛文2年（1662）に造営された亀戸天神社があるので、天神川と呼ばれたこともありました。現在の川幅は約41mとなっています。

この川は、北は柳島橋のところで北十間川（本紙13号で紹介）と連なり、南は豎川と交差し、江東区東陽五丁目で大横川と合流。水運上重要な役割を果たし、江戸時代には生活用水としても大いに活用されました。なお、区内の大横川の大部分は埋め立てられ、今では親水公園として整備されています。

横十間川が北十間川と接するところにある柳島橋は、享保3年（1718）に架けられ、地名から名付けられました。現在の橋は昭和4年の架橋です。この橋の袂には江戸城の鬼門除けとして、柳島妙見山法性寺が天正元年（1573）に創建され、妙見堂のそばには「影向松」という周囲2m余にもなる古木がありました。この松には妙見菩薩が降臨したと伝えられ、昼下がり松とも、千年松とも呼ばれましたが、元和年間（1615年から1624年まで）に將軍が御成の際に、「鏡の松」の名を与えられたといわれています。柳島橋から南へ100mほど行くと、昭和33年に架橋された神明橋があり、その東詰にあった亀戸神明宮にちなんで命名されました。

神明橋とその南200mにある栗原橋は、江戸時代には架けられていませんでした。このあたりは農村だったので、それほど橋を必要としなかったのです。栗原橋は昭和5年の架橋ですが、橋の名はその近くに栗原紡績という工場があったので、この名がつけられたとのこと。この橋の東詰にあり、萩寺の名で知られる龍眼寺は亀戸神明宮の別当寺でしたが、明治維新の際の廃仏毀釈で分離され、神明宮は現存しません。

栗原橋の南約400m、蔵前橋通りに架かる天神橋は交通量の多い橋で、幅員も22mあります。万治年間（1659年頃）に架橋され、亀戸橋と呼ばれていました。その後、本所地区の鬼門除けの神社である亀戸天神社が造営されたことから、天神橋と改められ、川も天神川となったといわれています。

天神橋の南400m弱のところには錦糸橋が、さらにその南200mに松代橋がありますが、そのいずれの橋も地名から命名されました。なお、昭和5年頃の地図では、錦糸橋は新場橋となっていました。また、松代橋のあたりは、かつては松代町と呼ばれていましたが、今では町名を江東橋四丁目と変えています。松代橋の南、200mにある旅所橋は、その東詰の近くに亀戸天神社の御旅所が置かれていたことから名付けられました。

御旅所とは、神社の祭礼の時に、神輿が本宮から渡御して仮に暫く留まる場所で、区内では牛嶋神社の本所二丁目の御旅所がよく知られています。

旅所橋は万治2年（1659）に架けられ、当初は橋名もなかったといわれています。寛文年間（1661年から1672年まで）に御旅所ができてから、この名が付けられました。長さ8間（約14m）、幅1丈（約3m）の小さな橋でした。

参考 「橋はかたる」

（墨田区教育委員会
昭和58年3月）